蛛巣亭平

北條家記

小滌又代記巻第七

一 伊勢新九郎伊豆相模を治る事

見しまで苛。小条氏恵云関八州を静謐小おさめ。賞罰そなでしく。其の政道を私をこなひ。民恵にして後々末代までも。同でこかるべしとなりひ法ゆるし。天運はくるまや。天正十八寅の年七月六日。氏恵云をえじめ。一家一門関八州の諸侍なろび果ぬ。そこで又乃池かたひて。灯まきふきえんと用ひまる時。光をはをがむとし。なげきても甲斐なるべし。結るふりまま。氏恵の先祖を勘るし。古きを見てまをあらかめ。史伝ふるふ。むかし山城の国は伊勢新九郎といふ侍あり。後ハ入道し小条早雲庵ま

士と二百人ゟ人を遣し。彼がいくハ三百人に加勢するをいそ
ハ伊豆の国をせやもとく。切て引べき汁策をむけ。
されなまして。民親なりて早雲。智謀民略の仰さしを
感じ。勇士をえらび。三百人加勢也。早雲のそみ為
んねと共悦浅からず。清水浦小をいそ。大船十艘用
ぎし。却合又百人の勇士に。下知していくそれ合戦
の勝負。大勢小勢小ならず。さらば士卒乃仰さしを。
一つにまとめしこゝぞうと也。此ホの兵士。他国に目をかけ。ある
の海路を渡す。戦場にをもむく所存ありしき
ぬ。そもしひ敵百万強ひ。ふといふ。なにかハ雌雄を変
せさるべき。さて上さまをて。いさめうのこゝにあらず。蓋てハなる
事ことを廻し。智恵を先とす。一事に戦ひを変し

万ゝに勝事をうるゝハ。是民略の威徳なり。理まぬ名
を永き世に残さんとて。弓矢丸男の本懐なれ頗る
勇士の本意といふ。智仁勇の三つの徳をかゝ。苑を
善屋にまもり。苑をもくまるをもりて義とせり。
此度諸卒軍戦をなげまゝ小をいそハ。悪者ハ
忠功によるべしとやされ。をのくいさしをみ
て。義を金石にあまり。かくくし。命を一蓑にあまり
く忠をいくさんとす。延徳年中清水浦より大船
十艘に。又百人丸案。纜といて帆風に帆をあぎ。明
ゞのに案出し。日中に伊豆の国。松崎。西条多子。阿
羅まの湊に黒雲を。此異なるを立。みな甲冑を
帯しぬまて。濱道在所のものも是を見て。屋上歌

海賊まゐるぞと。おどろきさはぎ。親をもとめて子をもとめて
我先にと。山嶺菅底へ。ぞゆげ入るゝ。又百人ハ毎より
くだ小あげ事。さらぐ久しさもなく。おもひくに毎度見
を陸へあぎ。若ぶきに陸屋をかけ。其屋に入てまゐ三
ケ条の高れを立る

禁制

一あき家に入諸道具小手をかく事
一一殘に通る抱何にもくも見ゆ事
一伊豆國中の侍并出民に至る迄住所を出事
右濱に堅停止せしめ早着遠犯の輩見あるに
をそれ在家を放火をべき者也仍執達件のごとし
右の三ケ条を立て所々に立置くり汲村里のあき家を

見るに。いろいろ家にも又人三人死。病者ゆしてあるに大
うさ千人にも越つべし。是ハいつ小と得ぬまゝ。此比風病
もやり。諸人又日七日づゝ前後もまゐ紀まへぞ。一家に千人
まづらひ。八九ハ死ゆ歟海賊。餓の事なれも。我ホあし
こゝぞ親ハ子をもとめて子ハ親をもとめて。いはゞくらも志らぬ迹
ゆしといふ。早雲ゆゑて不便の次第哉。孟子に大人ハ赤
赤子のゝをうしなハざる者也と云々。故に君子ハ萬事
小毎にて志らざる事なく。よくせざる事なし。諸人ハ人乃
為なるぞ。かれらを打捨。これさきへりならハ此病人
みな死べし。生べき者をもとめし。救をべき者をもとめ救を
をもひて。仁政の為とまり。急ぎ警師に信て。良薬を
調合し。又百人の人に打散て。看病し。薬を用ひ。

掲の舎を与へ給へる。此療養に入りて。一人も死せ
ず。又日三日の中に。皆平復し。命助り立ちる所恩賞
以外の世にかくも。難し。無しがくしとよろこび。此者ども
いそ紀。山嶺に入て。子ハ親に語り。おやハ子に志らせ。あらハ
此人々よろひ甲を恵給へる。あらまる紀鬼神のやうに
見えられた。此人ハ屋さしく。慈悲恩辱の生佛にて。
我らが命を助給ひけるや。急き山を出て。親の命子
乃能。助かりたる此礼ハ上給へと云ひ。皆山嶺を出
て我屋より帰り。よろこびかり。是を申つたへて。又里十里
四方の者。皆おとつくかれ来て。是ハそんじやうまゝ不乃
さふらひ。是ハ山守。是ハ生不の肝黄などくいへ。其所
のごとく。おそ遠ものべかしとぞと。下剣を出す。早雲病者ゆへ

一七日滞留。そうち小三十里。年急ハ皆みなこまゝ世。新下
ゆかり。絶る所に関東原二十里。山のおく深根と云所り
関戸傳テ寺吉信といふ者あり。是ハ以前しへ此所のゆかり
と云ひ。名高き人也。みなこまゝ家にぞ。あまり門さへ
古城とれ立ひ。手勢に門か二百。こゝ外一郡の侍共あつ
まりて。新兵又百ものべしと告来る。早雲申て。孫ハ
まさいとひかる。当国へ發向せと云へとも。むかふ敵なれ
も拙さびしくしひはるに。先かまを用ろがし。軍神の
血まつりまゝせんと。鶏鳴より此生不を打立らしろ乃
山を越。日中に深根へ世長さり。拙又愛しこの侍
共をせまて。そこ下に付ぬまゝ。みなこの勢二千に紀
まる。此城小ハ山。東南ハぬまゝ中。長不なし。西一方

急ぎて世来て。諸人となる者かゝる伊豆一国は。早雲
乃国となる事。我略世にあし守る名将。仁義とも
けしとをこなひ給へるがゆへ也。仁者といふは慈悲なる
敬なるて。あやうき者を助き。笑雅をもくりんとも歌
にへ来。死にのぞむ病者。千余人を助き。諸人の心
をなぐめ給へるも。是仁の道なり。扨又義者と云は。万
事よくしひ切て。死をべき所にて死をすると義なり
敵を目ろ前しにを治るも義の道也。聖人の制知
にも。道理小角まてあるを時は。救万の敵を[illegible]
いへども。無道にあらざ。殺をまじこさ道理あらは。振
る死者一人。はこをとしやこも。仁道にあらざとしり
給ひし早雲翌日伊豆の小条に付給ひぬ。此所むし

小条時政居住と。在所の者ゆゑれも。早雲ゆゑ
前ゝ右ゝ衆依頼朝。平治の法ゆゑ此小条蛭が小鴻
へなかされ。廿一年乃星霜をむなしくをくられし
が。四郎時政をこゝろひ。治義四年八月十七日伊豆
の国北国代。和泉判官兼隆を。屋牧が館まで御討
ゆゑ。義兵をあぐらまし所。吉例なりとて。此旧跡
と再興まで。早雲居城し給へも。皆人小条殿といふ
。早雲いとく。小条殿立まして久しき語也。まれ此名
もとめぎとは此也。猶人ゝ名をよぶ。早雲この家とつが
ん親皇ゆゑまで。三浦大明神より系籍母殿し給ふ
其事なり。不思議のつげまとりや。扨又大枝二本まで
りゝを。亂一つ出て哈打ゝるとゝんて覚ね。此夏をう

らかゝまゝ君子給へも。是国でゝきたる異夢なり。関東
奥列までの国司。あ上枝殿上聖相模あまゝまし
法を。此二本の上枝を。御退治まべしとゆゑれ。早
雲鋭甚浅りしぞ。此あ上枝を同ろがさんと。晝夜思
量をうづらさうと此也。上枝殿ハ。さがこ武義下総。常
陸。下聖。上聖。越後信渡。出羽。奥列までもあと
ごとく。後下知ゆゑ。あ上枝殿運の事也。
扇谷修理大夫定正の家老。長尾兄弟の中ゆゑ拝
揖出来。是上長尾左衛門尉子息四郎右衛門尉
んし。あまり此あ上枝殿の中あしく成て。弓矢乱
やむ事なし。早雲此事を申。諸国を乱をとゝ。
古人の言葉是也。あ上枝同ろぶべき時至りぬと人数

をもとゝ用し。結根足柄山を越。小田原の城との間に
事明應のしらひ也。此勢にて年。相模半ゝ切て
れ。其後定正は病死。氏ヲ大夫殿定を滅亡し。早
雲永正十五年七月十一日。三浦の道寸居城三浦の
新井の城をせめ落す。早雲子息氏綱時代少ちの
此ゝ義明云。上杉朝興子息朝定父子を討ちたる用ゝ
幾總ゝ国へ手をかけ。氏康時代に豆。相武。總ゝ国ゝ
人数にて。上杉憲政数万勝と。年久しく当たらひ。数度
に勝利をえ。天文十五丙午年の大合戦に氏康うち
かけて。憲政を追討し。関八州を治め給ふる事。文武智
謀世にまれなる猛強の大将たる故也。氏康いたく。花乃
うたらひをも。見かろくし。功のうたがひをも見をもくしら

小志なし。年年法侍分令をなげうつて。務骨を運
数度の忠功程無し。應し。其郡をあらきあらへ給ひ
かれも。法侍よろしひ乃眉をひらく。名誉を関八州
にあげ。子孫繁昌万歳をいはひ。氏政氏直まで又
代。静謐に国を治め給ひしが。小条家氏運来に
なり。宿報屋うやくかたぶき。天下にも賞き。佛神
をもて給ふまや。天正十八寅の年。氏直時代に至て
かろびぬと。早雲の合戦見は実説なりと云。此ゝ
後の題号。見愛の二字に應じて志るし給ふ者也

二 駿河海にて船軍の事

見しまゝ者。小条氏車と氏田勝頼戦ひの時。駿州
の内。高田寺と三枚橋は勝頼の城也。泉以。長久供戸

塞。志師ヶ濱。此四ヶ城ハ、まうかの出中となりし只今九の尽年
今川義元時代。小田原氏綱切て取しまゝ。氏直領國
となる。義元信玄時代。此まゝにて領を取返さんと遠州へ
んとありしに。以来。此所ニ叶わず。爰又沼津の浦つゞき。
香貫。志下。志師濱。真五。江浦。多比。口野。此末迄
浦。里ともまでが。氏直が持也。志師濱ニ八丈石。三日泊る在
城も。此城の後ろに。まうしどと云高山あり。勝頼もまたへ出
陣の時分ましても山に物見の乱かまて。人志を登らせ
浮島が原を見させん。勝頼の陣場乃松子目の下ニ
手すのれりおとし。されてもるが浦ニ氏直兵船げなく
へき湊を北少し伊豆宇瀬の湊ニ。兵船をとくしも
まく。沼津より八二里みて里ね梶原備前守を兵

衆を更かしらせし。割ちる艘ちる。当たる安宅射山角と
治甲が浦より下三十九安宅射山本流るゝ事と云船大
將式重次浦に居住せし。氏直伊豆の国にいて軍
兵と十艘絶り給ひぬ是とあふけと名付られ一艘
小櫓二十丁有。方合五十丁立の安宅船也。艘ことに
至さく鉄炮まく。手五百梯に桜と立玉のぬけ
ぬ楯よせて。その末梢とりて舟のたたき脇へとうこひ
下小水手五十人。上の矢倉に侍五十人さらく。矢さき
海より鉄炮をあつれる絶りさり。神さきニ大鉄
炮を仕付られり。然ニ天正八年の春。勝頼駿河
ニ出陣し。氏直も伊豆の国へ出るし。三嶋ニまくさを
立て。ひの重次乃兵船駿河海へ働となすべき也。

氏也下知に付く。毎日後河海へ家出せ。猪牙旗本
ハ浮鳴が原。流勢ハ沼津子本の松原より吉原を
寸地のもきまなく其砂の上海ぎふまで陣を結に
十艘の家にかけを起こる。大鉄炮をもなしかく敵
あらへぜ皆あとぐくを追散し面いくこる其砂地
白砂に見しこり扨又敵の流勢演へ来て砂をかり上
こを中にあらく鉄炮を数百挺かけをさ家を結而に十
艘の家汀を流こひこぎ行。陸と家との鉄炮いらる。
面のざとく家にあらるといへた面くの用ゑ。板垣
とをるゆなし。敵船ハ清水の此見ると小けをくと以
た小船ゆへ絶に出あハぜ。日暮ぬれバ伊豆へ海ぶと。然
ハ猪牙下知として三月十五日の夜いまだ明さるに

敵船三艘重次の見るとへ来く。鉄炮をもちへ
敵船ことを来りたれと。舟を出せと敵船ハ櫓二十丁立
まて小船なり此舟をおひ行所に。沼津河へも入どし
て。猪牟の陣場浮鳴が原下へこぎ行所に。又沼津
川より舟二艘出し。合又艘にぬぬ。演鳥に付て
こぎ行と十艘の舟をひかし所。此又艘の舟沖を
つぎ出くハ又浮鳴が原下へこぎゆる。猪牟ハ舟ハ
さ見掛こして演へおり下里。旗ゐ出るし見えたり。
猪牟演へ打出塩ゐ此中。猪ぶけに入てゐ鉄炮
とも有り。十艘の舟あつまりて。評定していち
船清ゐ沼津へも小げゆうど。又猪牟の旗本
が原の前海に来る事。猪牟下知とし

敵地と志して来りしをべて味方の舟二艘ハ濱辺ちかく
漕よせかくし。一艘の舟ハ沖より敵船と見まがふばかり
さらんと智略をめぐらしたりといへども小船ハそれやけ
ますべしとひつきかゝる。廣き海中に一艘と見へしかど
めぐる。勝利ハ二艘の舟なれバ。よく防ぐと見へてこそゆる
つべき覚悟ありける。ちらさる志るし。甲冑をもちて見ゆるも仕
勝負かなく焼もそ本陣に帰り給ひぬ。日を重ねこれ
きらバ十艘の舟。伊豆へ海海をわたり武者がるハそれ大
将ハ是非ともかゝるし勇退あるべき事也。軍の勝負ハ
時の運によることなれバ。まけるとしても恥にあら
ず。今でうましく起不しうく西とうくわと大将
天下不覚とぞいり。武略智謀ハ武士の名誉。是を志る

ど。文武の達者。鯰川上兵九勇士らハ立けり。先に敵小船
にて大船に出あひ。ころさるべきとも手柄にもさしていへどもしかし
作升かく八併の益あらん。相模ハ利ありと豁ますべし
口ゞ立方とうし。八世の為をひ也。いふいてん味方ハ注目に
が跡を見て。総軍をいそで遠引すらん。益ある舟軍
是稿とおのゝ却て恥辱を招き。犬ね末代までの不覚人と
いはれしぞ。さまでバ浮嶋が原。田子の浦ハいふてきてちあん
名所海士の釣舟。うかびゝ。原にハ煙とうろふで。今
かもとされ。北にむかり。かくり。波に大軍舟おして
うかび。原にハ鉄砲の筈の煙。空にまよふこそ九。異書矢
さらびの昔の。ゝん事なく。錦旗のひるがへしてこそま
是。かしへ野の長路。東国行脚せし。海道旅次の

紀に。田子の浦にいでて。富士の高嶺を打ながめて云。自人
親十七年冬の比。白衣の美女二人ありて。山のいたく
ちよはなしび。勅のとしかぐ富士の山紀に書るゝいかな
ゆゑそとおぼつかなし

富士の根乃。風にかゝるとよめり。白雲ハ。おまのしゝ女が
袖かとぞ見るとよめり。浮嶋が原ハいづくよりも
をぐれて見ゆ。水ハ富士の麓にて。東西へたるゞくと
かゝれ。浪あり。布をひかるがおとし。山のみとり。浪を
ひたし。雲も名をひたしなり。芦かり小舟而たり
さかさしてむまてるゝ。おほくさゝ来たる。南ハ
海のおりて。雲ハ見ゆたされて。雲の波をかゝり乃なし
いとふかき緑なり。をべて。流嶋の真砂にさへぎりなし

ひづゝ小。雲流の雲に流るゝをのぞむ。こなたさかなた
乃眺望。いづまでもとりゞく小山がそし。原にハ志ゆ雲の
そかり。多しゞく立まてりて。浦風松の梢にむせぶ。
此原昔ハ海の上にうかびて。蓬莱の三の嶋のごとく
にまたそなりて。浮嶋と名付たりと。雲ゆとその
流し。神仙の栖にもやあらん。いとゞおくゆかしく見ゆ

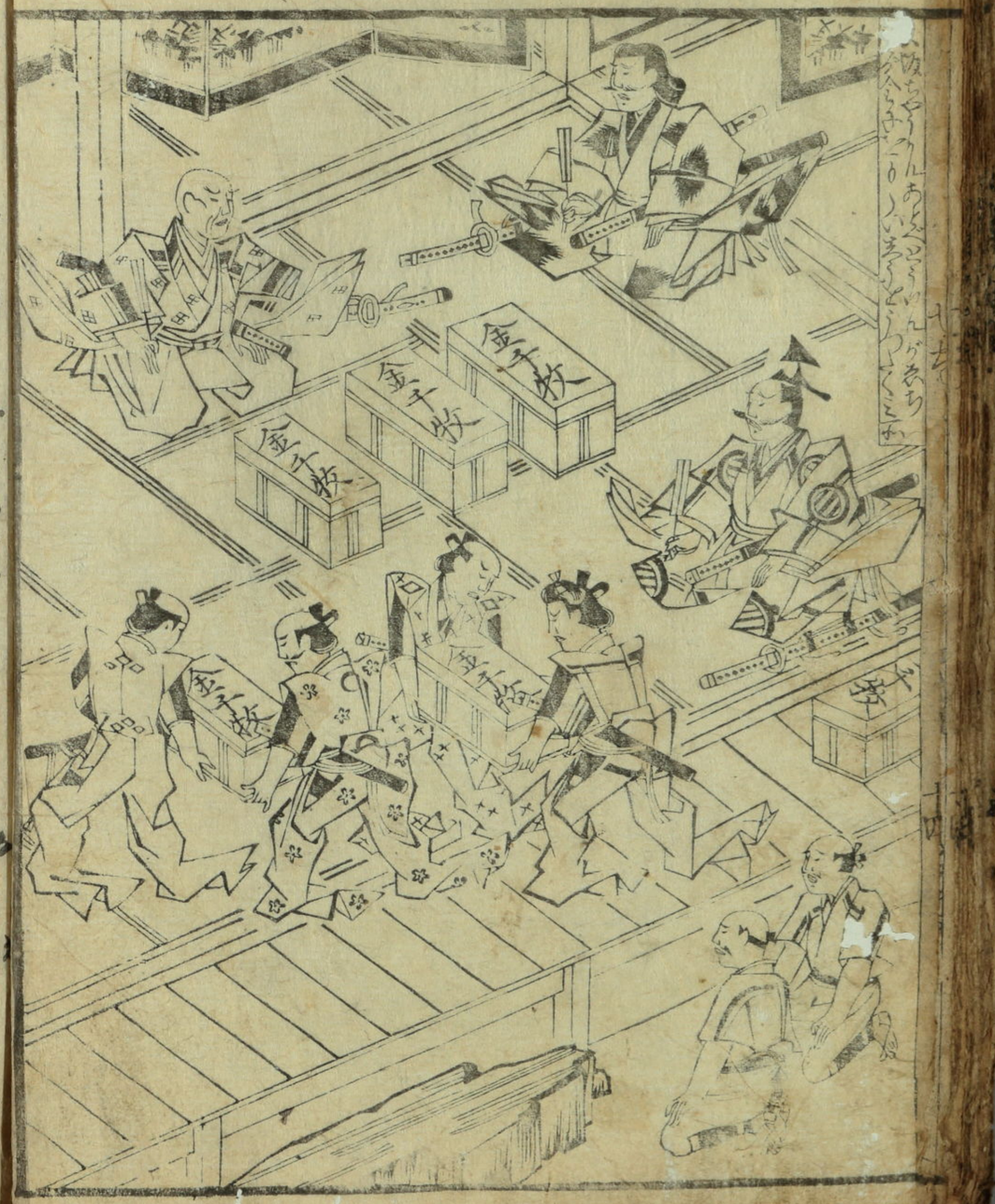
新ひたちに。浪の入江に富士の根乃。煙を雲を浮嶋が
原と詠せり。歴ゞて此原に流ゞきそ。子本此松原
立和あり。海の渚をかしまと。松たるゝ小生ゆたりて。緑の
浪きハもなし。沖にハ舟も行ちがひて。本此葉のうけ
内松に見ゆ。波子株乃松の本に。雙峯此寺。一葉乃
舟の中の。万里乃外と絶まるに。波も見をもづまじ。

眺望いづくにもとぐれたり
見ひさせは。手りと此松乃もとを。見たりに法
く派のうへか邦。と出時よりあり。後子本此松原ハ。猪
執時代海賊のためにさいりとて。切捨ぐりしてハ
名ばかりぞ殆里なる

三 上杉三郎 京虎滅亡の事

少しハ昔。越後乃上杉菊原輝虎入道鎮信と。相模小
條平氏康と戦ひ。終に和睦乃後なし。然に輝虎い
かなるおりたくにや。氏康と一味乃心さしたるによりて。
氏康の七男三郎殿を養子に取り。輝虎実
子なし。此ゆへなり。是によりて三郎殿十七歳にして。
永禄十二年の去。越後へ越山。家老にハ。堂山左衛門
尉山中民部とさしそへてまたり。輝虎望こゝろんぬ
と。自他の嘉幸なりしめなりしぞ。ハ上甥乃長尾北平
次京猪妹と。三郎殿の妻となし。上杉三郎京虎と
改名し。家督とつぎ去日山に居給ひぬ。然に氏康
ハ元亀元年十月三日に逝去。輝虎ハ天正六年三
月十三日頓死也。鎮信居所ハ去日山の本城。京虎ハ
二乃曲輪なり。京猪ハなしひの曲輪にたりしが。聖
心とさしたるに。越後の國をうばひとらんと。計策を
めぐらしとし以へ。京虎氏にハしそと愛にしたるを
鎮信第一の家老。小城丹後なるをたじめ。徳侍京虎を
なる敬によりて。ちん付なく。空乃せる所に。時日を移
さゞ。京猪同十三日人数引つれ。本城へたしまへ。

門とりこめ二の西揚と。月の下に見くらを付け。鉄
炮をもたせしかゝ。京虎あらふといへたおらへもど。出
城し。越後の蒔中。お鈹の城に丸こゝる。小城丹後な
ハ。越後の内。こちら丸城に。を落をあらそ見たるが。
猶伝聞死によそて。去日山にしてうひきよしときし。
急ぎさせ来じ。京虎へ一味せ。是によそて諸卒を。
吉光寺へ移し。陣を強くし。去日山へ人数をさしけ
かりし。軍をつくゝ。いとゝ多くふ。京揚がこまけるべ
しとぞ。人沙汰しける。然ども京揚へおりひくに
ませんり。一揆皆一味せ。京揚智略をめぐらし。夜
中に悪び入て。丹後守が陣丸。吉光寺の方へ人
数をまわりし。をくとれ寄て。ときをどゝ川と絶里。おめ



きさうんで切り込み。小城丹後守ハ。ち名を切る。大多
乃者ありといへ。たおりひの外とおどろき。もてまたい
ぐんを。荷中乃城をんがけ落行所に。京虎軍乃来
まや。小城いさ手負。荷中に入く。ち日小死を。武田
勝頼ハ。京虎の妹むこゝり。越後鉾楯乃よしを。
人数を法りし。勝頼も迎より出陣する所に。京虎う
ちまけ勝頼の陣中に入。先りて安堵の心ひとなる。
ち法勝頼乃家老。長坂長閑。治部道下。出仕しも威に。
甲斐國中龍鳥も落ぬべしといふ。此あ人深歎にふ
なり。無恥を沙汰し。武田乃家滅亡のもしと。立ち
ハも。総に輝虎高夜中。京都へせめのぼるべきよし。
ゆてのなく度に。貯へをさゝる。黄金数箱に入をさ

ゝるを。幸なるかな。此金を取出し。長坂長閑に千疋。江
戸道中小子疋。勝頼へ五千疋ゝかり。越後より
かげゆく。京虎を誅罰し。此度京勝を出引立ましき
あるに付ては。生前の大幸なるべきむね。使れをさし
ゝかはせ所に。後疋子疋ゝの金を見て心まどひ。勝
頼へ申て云。君は織田信長といふ大敵を持給ひて。今ゝ
ひ取んことなし。さらに越後と相模一味にをいては。甲
州持國をさして。おやうかるべし。三郎殿を誅し。越後
と和州勝るべしと思さりに。いさめ申に付て。勝頼は
前事。疋子をさしひなれば。其後にまかせ。三郎を害し
給ひぬ。越後鉾楯の義小田原へ申し。急ぎ人数をさし
ゝかはせ所に。先陣は上州沼田に付。氏政は武州河越

まで荒る。遠系ゆへ。三郎は勝頼のために誅せらるゝ
よし。途中より。益なく引返せと語りたれば。かゝる人
なる人ゆへて。京虎の滅亡は。輝虎かほてのちりこと。
是云によりて也。其乱觸を取るに。輝虎実子なれ
ゆへ。甥の京勝を賞子にしひさゞめり。されども
これ。明日小を死をなしば。氏政は信玄聟一味なり。
越後へ立てゝ小をくは。京勝は幼稚ちゝして。ひと
乃國となるべし。しかしさぐ氏康の子三郎を賞子に
しらひとき。京勝成人までは。人ぢちに死なるとん語
ぬしと。家老の者にいひふくめ。永禄十二年より。天
正六年までは。十年以前より此謀計なりと語る。或
老士ゆへて。それ人は一生涯。欲心に両よひ。子は親とあら

きひ。才ハ兄と拝揖する事。いかしへもしてもあらひなり。輝虎出云なしといふ事。京猶越後と云べき計策なく。三郎を誅しこゝろハ理り也。さて又輝虎出云。もし治定しをいてハ。悪逆無乃果て。仏神の加ことをうべし。かくのごときの武略。先古にも少も。末代にくもあるべからず。是偏に小人の謀にく。大人にハ有れ事也。かだかり我国あやうく思ふに至るハ。隣国と表実に和平なくして。仁義に背きたる事をとりて。縦ハ一旦利をうる事をといふとも。世のゆびさしを不人のとそ有し計略也。ざいくれん本程なし。悪事をとりて程とせしと云ふ。神明に撰乃なし。鬼ゑこ正しきをこのむ。あゞ蓋しをむひとしき分れまざこひとの

がれ。祈念を先として。家の運を待ハ志なし。然とさんバ。悪鬼却て守護し。神明をれたち利生を。それ大ねと云ハ。仁乃をもらし。慈悲を敬なく義をんとし。清白を分こして。業報をなそるべきなりといへり

四 東海にて。奥貝れ畫を事。付人奥の事

見しハ今。相模。安房。上総。下総。武蔵此五ケ国乃中に。大なる入海あり。諸国の海をめぐる大奥を。此入海をよ記せしを不と知くあつまるといへ。関東のあまれ事を志らず。儀鳥の奥を小網釣とされてれ計なり。然而よして武州江戸をんじやうゆへ。西国れ海をもことぐくも関東へ来り。此奥をんく。然ふに幸う

なと。地獄あしといふ大綱と作り。あしの毎にたしに。二人
引て持かどの石を二ツくゝ里付。是を千貫石と名付
縄を二筋付。長さ三尺かど。たゞ二寸乃末をぶりと名
付く。大綱乃下くに。千を二千を付。此末といふ
末奥の国にハ。ひかたといふ。早毎一艘に水手六人宛。
七艘に乗る。大海へ漕出く。綱をおろし毎方へ三艘
ぶく引かけて。大綱を引。一艘ハこゝり毎と名付綱
なにはなく。左右の綱乃さし引ける。此綱の内にある。
大奥小奥一ツを卯へも海へ事なし。海底のうろたい
までもあとゞく。是引よる。扨又砂底にある貝をとら
むとく。綱のりとに石を二ツ。をも荷につけ。そまつに
かゝ熊手を作り付綱を海へおろし。大綱を引たへて。毎

の内にまき車を仕付。いかりを打て。綱を引ぬれバ。砂
三尺底にあるりろくれ貝たを。熊手にかけて引たこ
ぎ。天地かいひやくより。関東にて尺も中をせぬ海て
いの大奥。砂底の貝を取よる。其程に四時を待く。波の
上砂の上に出る。奥貝たしてハ時をしらず。常にぶくし
ぬれバ。江戸にて初奥初貝のさゝなし。たや二十四五
年以来此地ごくあしにて。ぶつくしぬれバ。人うハ十れ
抽一ツをなし。数畳汚池に入ぎんハ。奥鼈あけて食
うらぎとハ。孟子の云事なり。其上淮南子に。流を
なりてもなどるとさんバ。鳴年に奥なしといへると。
おりひ出くさんさてさよりろくの奥れ中にとり
かゝ鯛鮑こそ庶しかれ扨採鯛と名付。其に用ひ

鰹を秋乃季によりし給へるも。いとやさしかりき。
鰹鰹ハ毎年夜に至て。西海より東海へ来る。伊豆
相模。安房の浦に沿りよる。初鰹しやうくわんなりと
天文六年の夜。小田原浦をて。鰹毎に得ぐうりび。
鰹とつる。氏よし小條氏綱守臣。小毎にめされ海面
しまぎとは見掲。珍事の出起。盃酒に具し給ふ
所に。鰹一つは毎へこひ入さり。氏綱喜悦に於ばし
めし。勝負にかつうとは出税羽。すゝめなしも。即時
酒肴に用ひらる。然におなじき七月上旬。上杉西郎
朝定。氏州へ發向のよし告来る。氏綱公陣同十五
日の夜いくさに。氏綱討勝て。氏州を治め給ひぬ。其
比ハ四方に敵なく。毎日戦ひ屋ん事なし。氏綱貴

蛟し給ふ伴の鰐ハ勝負ありけるとぞ。さてもやし
常にお文字なし。諸侍戦場門生の酒肴にも鰐をとり
ちらし見ひ給ひぬ。梅文中第綱田に人魚ありける
ち人に似て腹に宝あるひまのごとし。海山河にもすむ
魚人のあらはるゝ人をそれてくるハなどとむかし見ち
みくも羽の海浦へ人魚死てあがりける事あるに
とまつり文治五年の夏そとの浜へ人魚あがりける。
人あやしみこぞりて見んとする。おそろしき年乃
秀衡子息こともく滅亡ヿ。又建保元年乃夏
秋田の浦へ人魚あがれるより、縋余党へ連ます。
此むねとそ世ようしかる世給人ハ奥へくのりとひとり
まつて此祈祷あり。同年五月二日。和田義盛大い

なきおり。建仁三年七月。津軽乃浦へ。人魚ながれ
よる。将軍実朝公。悪禅師に害せられ給ひぬ。宝
治元年三月十一日。津軽乃浦へ人魚ながれよるよし。
須臾もなく。是によりて。八幡宮において御祈祷ありし。同
き六月五日。三浦泰村が合戦あり。同二年九月そと
乃浜へ人魚ながれよるよし。風聞あり。ここに鎌倉
のさがりんハ。北条左近将監時頼なり。試ようとして。
先紀不快の義なりと。おどろきながら此国司。三浦
又郎左馬ノ射盛時に。為し仰によりて。奥州へ飛
脚をはなたれ申て云。去九月十日津軽の浦へ人
魚ながれよるといへども。先て三度ほど須臾をもりて
不吉乃事。地下人ぬしも申上ざるのよしを申し。武義ね
快ならずとて。将軍家諸寺諸社へ御祈祷の事あ
り。魚の中より人魚ある事。正嘉海人乃殺生。以ふ
よろしからずとぞ申されし

五 無法勝負の事

夫ハ昔天正の比とかや。常陸の国鹿島に。
諸国一頭と云て。無法乃名人あり。いふ人の。飯塚
長蔵入道といふもの。よく人をかしこと。ひかり名と。郷の弟子
どもの助。宗四小熊。根岸兎角と云て。名をうる弟
弟子三人あり。此若共無法の力をとらずにかう。ことごとく
ほそひけいこあり。諸国に。兎角病により。頭なくお家
也。兎角病人となりて。逆電をまつる。弟子ども
もかくし。兎角めを。とうけうをとり。来る者をまつるぞ。

師の源恩を忘れ事。仁義の為に。そむき神明の
冥感にもしづまてたる。師の罰のがれ為にしむ。かくまぶ
しと知ならば切てもてべきとと矣ドもまとぞかみ。
あ人は分まづしられば。刀脇指を沽却し。一衣まて
も代がへ。醫術を通し。三年看病をと以て師の
徳恩。は并に死たり。彼蒐角。相列小田原へ来る。
天下無双の名人と云なりしも此者長ちうく。愛
は山刻のごとく眼に角あるを抱きごく。壹ちに魔
法をおこなひ天狗の変化と云取の外下をうん堂
御者なし。老名山太郎坊よりて来て。兵法の秘
術を傳ふ事とかく。微蒐流と名付。人にとし弟
子も多かりしかり後武列諸人へ来て。天名小名に

弟子に相傳くまて。上下ゑ人ゑ驚ばおとし。然に常陸
乃お弟子あ人はよしを安乃び。見抵に諸人へ申。蒐角
を討べし。其上師傳のるとしを理に私曲をかまへ。微蒐
流と号し。兵法はたゞる事。師も当のかげまて。さて
や悪しとおぼしもん。天罰のかゝるぞ。木刀まて打
ちし。蒐角がかたるを。諸坊よさらし。恥をあたて不
能かまに二人を二人にて討てかうましかたぞ。世の常にも
然へからぞ。我々が手なるをとも。蒐角まて通てよく知
たまし。あ人が中まて園をとり。さらしにはれあたる者一
人諸人にしべしと定め。小熊園にとり通て諸人をさ
してけり。どろの助は國にはちぐまり。時日を後さぞ。麻絡
乃明神りまうでる。祝書をこめ出ける

敬白願書奉納鹿嶋大明神御宝前

右心ざしの趣ハそれがし義父渋谷之助が兵法の師匠。続
思一羽毛男よ。家鉄乃和子あり。根岸蔵角と云
付たる者御乃趣を。あるとりけて。顔ぜんしこと。今
武州江戸にありそ。秘曲を。たまさかひ逆盛とい為
ひ年。是によりて。も我を討ん為それがしのお弟子
岩の小熊。江戸へも世をかづきりあかざ往くね
神力と守りたまふ中事。此ぶきこそんねよりそな
二人兵法の威力をもつて。日ならず本望を勤め。新
社や破損を建立しむるの一若小熊利とかう子
御まよそおそれしまれ。雌雄を決とへし。子より
一つそれがしまくあるし。ああ所がまく当社へ御参詣。神

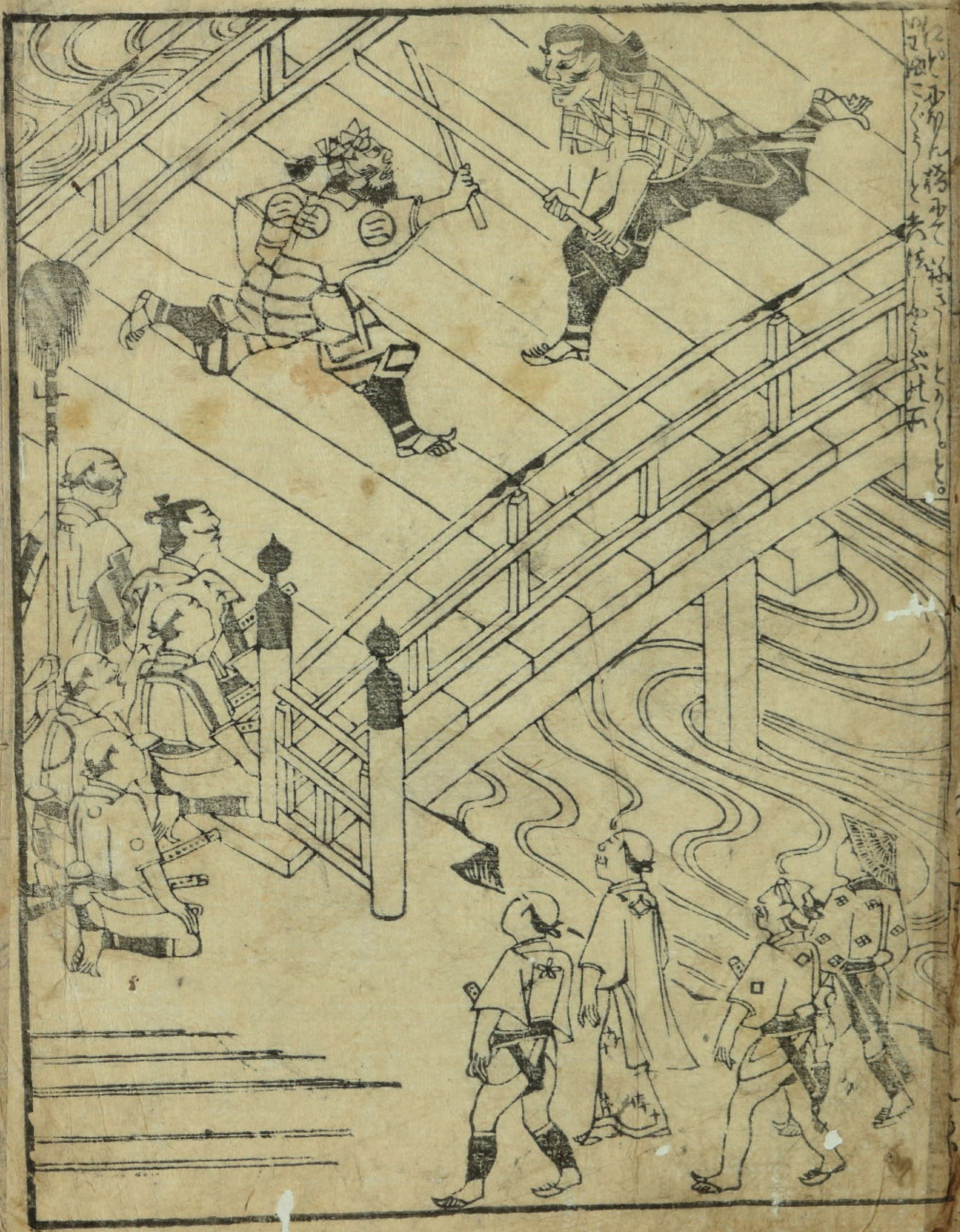
社まく勝中文字よ切ちらつさとり出し。悪血をもつて
て。神社をおとしくあり小そある。悪男を殺して来まま
永劫。当社の庭を草よ葬とありし。野干の栖となさを
べし。まで此願毛頭。私欲よ非ず。師の恩を謝
せんがためや。いそぎ神明力御憐これをまけのまん

仍如件

文禄二年癸巳九月吉日　土子渋之助

之書て。御宝殿よ納め奉る。悔りぬ。桜又小熊ハ
江戸へ衣を日よ継て急ぎける。然り小熊江戸へ
来りきまんるまよ小男まく。髪ハふろ此とも
ぬうひま。あつく生ひ茂り首。眼さうめ如。泚よ
君をうしあるからず小熊あり。此者若く生面がまま事をなさ

せましての城のたて。大膳のりしふ小児札を立つる。
とりもきな兵法の人是あるふとも此こち仁と勝
負を望し師弟の約をさむべし。文禄二年癸巳
九月十五日。日本無双岩乃小熊と書くり。籠角の
前出。数百人あり此札をみて。みくき座つめが札の立
所にて。天下にかくれなき。籠角渋りおもしろと名て
まで何の来りて立去る。先札を打ちても小熊
とし来のひ。去り。構りて打殺せしの。其まま
りとく也て悪人夜の也。数で大に入と小熊お
るべし。去りふ一うち小。手れ打るかし。浅人はりせんと
殺せし。所をの夜兵丈義をもし。則大ちし女人出
より所をも我をしの女小。浅を持て続きなし



女人の力腕指と銘り持のぬ。扨女人たちの東西へ出
る。荒角ハ大筋乃小袖にのこと面をのめうちかへくり
だら海を着。白布をしめて。たまだけの黒だすき
りりんちとしめ。木刀を六角のふとくなる作り成
まく筋みの○とまうし。前には晩をまとへ。髭を抜いでせき
袴まくり出る。小熊ハ荒色の木綿あをせにあさぎの
木綿のうら海を着。足中をまき絵色がちの姿にて出る
の木刀を持出。扨方よりもみかけてくみ。まみの木
刀ふくてと打あひ。そびつひよ押けるへしかし。小熊荒
角をおうちかさへ押付。片足をあげて。さるさ海より川へ
ころくとおちしそより小熊ハもとまへも上へ越し見え
しが。さ山度の仕合にも出合なりしと。皆人ほくこそり荒角

ぬまて鼠のまだくこまくこれ[illegible]電を小熊ハ手
下ま名をあげそもり。通光ハ見ぬせしかた。人群集
有そもしかハ見ぎりなり。鎧花ひくし鎧ひかるハ
者どもハ乃そもしかひをハ見るに。末刀を脇に挽。あ方し
しまうけて。そくこと打合そもり計なり。あ人様の太
刀を知といへ者ハ様位ましてハ又ハ人の身を同南にして。
切ふ事ハ乃太刀ハなしと知まそもり。むし下総の
国。書籍ハ塚原本傳と云。兵法者ありしが。是希代
乃名人。末代まをいて。本傳が一つの太刀といひならハせ。
ていまて太刀の名。様くまことといへた。こそくまつ二本ハ一刀
と知れそもり。但一刀と志るといふ事。熊と石なくしま
中かのくら斗に。至りがたし。教南も小熊と名人

[illegible]

[illegible]

[illegible]